

周辺からの記憶 49
2023年 東日本・家族応援プロジェクト+
村本邦子（立命館大学）

2025年9月、プロジェクトで福島を訪れたばかりだったが、10月30日から11月2日、現在、広島でサバティカル中の人類学者 Moradi Fazil さんを連れて、福島を案内した。いつものコースである沿岸部の視察と出会った人々のインタビューであるが、今回は、特別なアポなしに、その場の流れに任せて調査することにして、双葉屋に宿を定めた。1日目は、古滝屋考証館の里見喜生さんのお話を聴き、ヘリテージツアーに一部参加させてもらった。あちこちから来たという年配女性たちのグループと一緒に、2泊3日で炭田や風力発電などあちこち回るという。ずいぶんと熱心で、いったいどういう人たちのかしらと思ったが、渡辺一枝さんの講演を聞いて興味を持った人たちらしい。ネットを調べみると、たしかにこれは一枝さんのアイディアで始まったものらしい (<https://maga9.jp/221012-3/>)。

2日目以降は、「おれ伝」の中筋純さん、今回、初めて知り合った「おれ伝測定所」の白鬚幸雄さんのインタビューもさせて頂いた。夜の双葉屋には、研究者や実践者などさまざまな立場の人たちが国内外から集まっていて、お酒を呑みながら、あれこれ語り込んでいた。良い出会いとなり、フィールドワークはやっぱりこうでなくてはいけないよな～と思った。院生たちの教育プログラムとして来ると、限られた時間でいろいろ見て欲しいと思うので、なかなかこんなふうな動き方はできない。授業としてのプロジェクトは今年で終わるので、来年からはのんびり行こう。



9月1日（金）山元町フィールドワーク

今年のプロジェクトは、院生4人、総勢8人で、9月1日（金）から5日（火）の4泊5日で開催した。

まずは、やまもと民話の会の方々の案内で、戸花慈母観世音をお詣りした。これはやまもと民話の会の代表だった庄司アイさんが、家ごと漂流し、一夜を過ごした奇跡の場所で、アイさんたちの強い願いで、2014年10月に建てられた。東北お遍路巡礼地にも選ばれ、私もアイさんに案内してもらったことがある。でも、アイさんはもういない。



それから、宮城県山元町震災遺構中浜小学校を見学した。山元町は常磐線沿いの最南端の町で、600名以上が津波の犠牲になり、中浜小学校は、4億7千万をかけて震災遺構として残されたそうだ。10分後に10mの高さの大津波が来るという速報に、20分かかる避難所への移動をせず、海拔10mの屋上に上がる決断をした校長先生の話に身震いする思いで、その階段を上った。ここは何度か訪れているが、「中浜小学校物語」という紙芝居に、小学校の歴史や町の人々の思い、学校の屋上で瞬く星を見て一夜を過ごした子どもたちの話を知っているので、その光景が眼に浮かぶ。



やまもと民話の会との交流

その後、ふるさとおもだか館（山元町防災拠点・坂元地域交流センター）にて、やまもと民話の会の6名の皆さんとの話を聞いた。震災から13年目を迎え、長くおつきあいしてきた方々が一人、また一人と鬼籍に入られていく。やまもと民話の会を率いていた庄司アイさんももういらっしゃらない。時の流れに寂しさを感じる。

はじめに、寺嶋重子さんが、山元町の伝説「下田沼の大蛇」を語って下さった。山元町

坂元に、下田沼という沼があり、それを見下ろせる御狩屋崎という丘の上に立派なお寺があった。この寺には、器量もいいしお経を唱えるのも上手、人柄もいい、笛の達人の若い和尚が住んでいた。ある月の夜、笛の調べに引き寄せられた美しい姫が現わされた。それから月の美しい夜にはいつも姫が通ってきて、楽しい時を過ごすようになる。やがて二人は深い仲になり、赤ん坊が生まれたが、赤ん坊は大蛇の姿だった。実は、姫は下田沼の主の大蛇だった。姫は子を抱いたまま下田沼に身を隠し、残された若和尚は何も手につかず毎日ぼんやり過ごしていた。ある夜、大蛇が現れて和尚を殺してしまった。その場所には和尚さんのお墓が祀られ、和尚壇と呼ばれるようになった。そのうち、寺は無くなってしまったという。



それから、「宝下駄」を語ってくれた。昔、貧しいが親孝行な息子と母親が暮らしていた。息子は金持ちのおじさんにお金を借りて、薬を買って母親に飲ませたが、良くならない。もう一度、お金を借りに行くが、kしてくれない。困った息子が八幡様の境内で思案しているうちにうとうとと眠ってしまった。夢の中に、白い髪を生やしたお爺さんが出てきて、この1本歯の下駄をやるという。これを履いて転ぶと小判が出てくるが、

そのたびに背が小さくなるから、やたらと転ぶなどと言う。目が覚めたら、一本歯の下駄があったので、早速これを履いて転んだら小判が出てくる。息子がおじさんの所に小判を返しに行き、事情を話すと、おじさんは借金を帳消しにしてやるからその下駄を貸してくれと言う。翌日、下駄を返してもらおうと、息子がおじさんのところへ行ってみると、庭先に小判が山積みになっていたが、オンちゃんの姿は見当たらなかった。小判は息子のものになり、母親と一緒に幸せに暮らしたということだ。

どちらも「えーっ」と声の出る話だった。和尚さんは死んで愛する妻子の元に行けたのか、欲張りなおじさんは、小さくなつて、その後どうなつたのか。ほんと、民話は面白い。

それから、庄司アイさんの娘さんである萱場裕子さんを中心に、『巨大津波』(やまもと民話の会、2013、小学館)作成の時の話を聞かせてもらった。震災から2ヶ月後、証言集を作ることを決めたやまもと民話の会の会員6名は、アイさんを中心に、手分けをして、身近な人を訪れて、話を聞くことを始めた。新聞の折り込み広告の裏紙などに鉛筆でメモを残し、家や避難所に帰つてから、その日聞いてきた話を文章化していった。アイさんはワープロを持っていたので、第1集はほとんど自分で打っていた。ところが、話を聞く方も同じ体験をしてしまうような感じなのか、証言を聞いて帰つてその作業をすると、ぐったり疲れて、その後3日間ぐらい寝込んでしまっていた。

裕子さんは、55歳で早期退職したので、ワープロを打つぐらいだったらできるからと手伝い始めた。聞くのに徹して聞いて、家

に帰って思い起こして書くということで、アイさんは字が上手な方だったが、娘にも読みにくいびっちりと書いてある神を渡されて、それをワープロで打ち込む作業は大変だった。自分も被災して復興していくかなければいけないのに、なぜこんなことをやっているのかとも思ったが、不思議なほどみなさんパワフルだった。「今考えてみると、母は、この仕事を残すために助けられた十年の命だったのではないかと思う。それがどんなふうな形で後世に伝わっていくのかわからないけれど」と裕子さんはおっしゃった。

本当に命をすり減らして、よくぞこのような貴重な記録を残してくださったと胸が痛み、感謝の念が堪えない。

時代とともに環境も変わって、若い人や子どもたちに民話を聞いてもらうためにはいろいろ工夫が必要であるというお話も出た。方言もわかってもらいたいと思うと、説明が行き過ぎてしまうことがある。そうすると昔話の雰囲気というか、形がちょっと崩れてしまう。話し方によっては何となくなんとなく伝わる。アイさんがしゃべるのを聞いていると、方言でも子どもたちはしっかりと受けとめていた。一生懸命説明するというのではなく、伝え方なのだということだった。



多賀城メンバーとの交流会

9月1日の夜は、今は多賀城プロジェクトを率いてくれている丸山隆さんと黒川恵子さんと打ち合わせを兼ねた交流会を開催した。楽しいひとときだった。



9月2日（土）みやぎ民話の会との交流

9月2日（土）の午前は、仙台メディアテークの見学をした。メディアテークには、「311 わすれないセンター」の展示に録音小屋や記入シートなど「コミュニティ・アーカイブ」を残す仕掛けが工夫されており、数々の小さな声に触ることができた。



仙台市民会館にて、みやぎ民話の会のみなさんとの交流会を開催した。今年発行された飯館村の菅野テツ子さんの語りからなる長正サツキ・島津信子・山田裕子共編『飯館村菅野テツ子のむかし語り 語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』(私家版)制作のお話を聞かせて頂いたが、テツ子さんの語りは、2014年、丸森で開催された「みやぎ民話の学校」で、私も聞いたことがある。飯館村には何度も足を運んできたし、ある程度、イメージを持っているが、今回、『語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』をあらためて読む中で、村の細部が生き生きとより立体的に見えてきた。そのテツ子さんも、この冊子の完成を待たず亡くなられたという。

長正サツキさんは飯館村に住み、20年以上前からテツ子さんや彼女の母キクさんのお宅を何度も訪問し、キクさんのむかし語りを聴いていた。そこにはテツ子さんもいたのだが、ただ黙っているだけで、長正さんもキクさんの話を聞くのに精いっぱいで、それが誰などかなど、ほとんど関心が向いていなかった。キクさんが亡くなり、弔問に行って、テツ子さんと言葉を交わし、娘さんだと知った。振り返れば、よほど話を聞くのが好きだったのだと思う。テツ子さんは、いつも、じっと黙って母キクさんの話を聞いていた。

原発事故で避難生活を余儀なくされ、2013年に当時、松川町の仮設住宅にいたテツ子さんのもとに、島津さんや山田さんと一緒に訪ね、むかし語りを聞かせてほしいと頼んだ。テツ子さんは、「母親の真似事」と、キクさんの十八番を語ってくれた。それが、キクさんの語りそっくりそのまで、

本当に驚いた。テツ子さんは、キクさんが亡くなるまで、人に語ったことはなかったそうだ。

島津信子さんは、2014年8月に開催された丸森町での「第8回みやぎ民話の学校」の実行委員として、丸森は福島県と隣接していることもあり、他のメンバーと相談の上、「福島の部屋」と題する分科会を設けた。そこに福島からの語り手を招いて、むかし語りとともに、事故後の避難生活についても語ってもらうことにした。テツ子さんにもお願いしたが、語り始める最初にも、「これは母の真似事です」とおっしゃられた。これはキクさんのだから、自分は母親のようにはとてもできませんと最初におっしゃって、謙虚だった。

その後も、「福島の部屋」を一緒に担当した島津さん、長正さん、山田さんの三人は、何年間にもわたって何度もテツ子さんの住む仮設住宅や避難先、飯館村の宿泊施設などに足を運び、彼女からたくさんの中を取り、飯館村の暮らしを残したいと、この本を出版した。ちなみに、この表紙カバーの文字は長正さん、イラストは島津さんによるものだという。



長正さんは、現在、飯館村に帰還されており、若い人たちには、帰還して大規模な農業経営を始めている人もいるが、高齢者は避難先で最期まで過ごすことを決めているという人が圧倒的に多い。飯館村には病院やクリニックもなく、車の運転もできなくなるし、現在利用しているところに通うことも難しくなるためだ。高齢者だけが帰還して子どもたちと離れて暮らすと、緊急事態が起きた場合、子どもたちに迷惑をかけることにもなる。わがままは言えない、帰りたいのはやまやまだけど仕方ないと、多くの方が考えているそうだ。



それから、長正さんが本書に収載されている「婿の杵枕」を朗読し、ご自身の「狐に化かされた話」を聞かせてくれた。

小学4、5年生の頃、遠足の弁当に入れる稻荷寿司を作つてもらうために、夕方、自転車で油揚げを買いに行った。道中は、狐がよく出ると言われている山の中を抜けていく砂利道だった。店で買い物を済ませて、前のカゴに入れて帰る途中、なぜか急に自転車のペダルが重くなり、タイヤが動かなくなった。仕方なく自転車を押して引きずりながら帰った。下り頃になった時、母が迎えに来てくれて、「サッコかあー」と呼んだ。「かあちゃーん」と返事をした途端、タイヤがクルクル動き出した。あれはきっと、狐に化かされたに違いない。もしあの時、母が呼んでくれなかつたら、油揚げは狐に取られていたに違いない。「あれは絶対、狐だった」と。

この話は面白かった。思い出してみれば、私の田舎にも河童や人を化かす狸がいたものだった。河童の鳴き声を真似て教えてくれた父も一昨年、逝ってしまった（そして私たち子どもは、たしかにその声を聞いたことがある）。

昼食には、それぞれの畑で取れたトマト、きゅうり、なすと、飯館村で除染が済み2年前からとれる様になったお米で炊いたおこわを頂いた。とても美味しいくて、ほっこりする。長正さんたちも、後半にはテツ子さんを訪ねると、そのたびに大きなお鍋に煮物をどっさり作って待っていてくれるそうだ。「そんな関係ができた」とおっしゃっていたが、民話には土地のおいしい食べ物がおまけについてくるらしい。そんな関係を私たちにも持たせて頂いていることに感謝の気持ちでいっぱいだ。



お話を聴きながら、「聴かせて頂く」ということに対する民話の会のみなさんの真摯な姿勢に居住まいを正す思いだった。院生たちとともに私自身も、あらためて学び直さなければならない。

多賀城フィールドワーク

午後は多賀城へ移動し、震災当時市役所の職員として避難所運営の指揮に当たられた丸山さんのお話と、おおぞら保育園の園児たちを無事避難させ、トレーラーハウスで園を再開させた黒川先生のお話を伺った。

黒川さんは、震災当日の保育園の様子から、保育園の再開、保育を継続するためにトレーラーハウスの購入を思いついたこと、トレーラーハウスでの保育など、12年経過する中での変化についてお話くださった。丸山さんは、震災時、避難所で責任者として

経験したこと、これからの防災についてお話をされた。できる人ができることをやる、必要に応じて柔軟な対応をするなかで、被災者を主体的存在として避難所運営を組み立てること、支援者は支援するために「寝ること食べること」を確保しなければならないことなど、支援者として忘れてはならないことを話してくれた。また、防災のための資料を頂いた。

その後、末の松山など、多賀城市内を案内頂いた。2012年から毎年足を運んできた土地だが、あらためて大きく変わった街並みに時間の経過を感じる。





9月3日（日）白河プロジェクト

9月3日は白河市立図書館「りぶらん」にて、「東日本家族応援プロジェクト+（プラス）2023 in 白河」を開催した。午前は「団士郎の漫画トーク」、午後は「あそびとおはなしのひろば」、その後、現地でご準備頂いた浪江町出身者への「震災の記憶を書き書きする」だった。

多くの人が立ち止まって漫画を眺めている様子が見られ、トークでは、家族をテーマにした話があった。「あそびとおはなしのひろば」では、小さな子どもや高校生、大人も一緒に手玉遊びをし、しらかわ語りの会の鳴島さんの語りに聴き入った。子どもを惹きつける巧みな語りや言葉かけ、まなざしに学ぶことが多かった。世代を超えた楽しい交流の場となった。





「震災の



「震災の記憶を聞き書きする」は、EMANON 青砥さんのプロデュースで、浪江町で被災された避難者たちに、震災にまつわる大切なものをご持参いただき、高校生や大学生がそれにまつわる体験を聞き書きするという内容だった。今の高校生は震災当時 3～5 歳で、震災の記憶が残る最後の世代になる。

大学院生がサポートする形で、グループで話を聞いた後、全体でどのようなことが語られたのかを発表、共有した。貴重なお話をたくさん聞かせて頂いたようだ。

たとえば、浪江町で陶芸をやっておられる大堀相馬焼の 13 代目窯元の男性である。江戸時代から続く歴史を背負っているにも関わらず、避難先の東京のハローワークで生まれて初めて仕事を探すと、相馬焼以外の経験がなく、何の資格もないからと、公園管理や倉庫片付けの仕事しか紹介してもらえなかつた。やむなく町役場で臨時職員になり、公共施設の草刈りなどやった。草刈りする時にスズメバチは白が嫌いだからと、蜂に刺されないよう白いシャツを着ていたと、そのシャツを持ってこられていた。「浪江を離れ、生まれて初めて面接を受けて仕事した時のシャツ。今でもたまに夜中に目が覚めると、なんで今ここにいるんだと思う。何もしていないと、気が狂いそう。それで、毎日家内に作ってもらった弁当を持って、気を紛らわす」ということだった。

原発ができる時、彼は高校 1 年生で、父の代わりに地区の集まりに行ったことがあった。いまだに覚えているが、その時、「東京で使う電力をここで作ってロスはないんですか」と質問した。送電線の技術が発達しているからロスはありませんという答えだった。

嘘だと思っていた。

あの日、3月11日の夕方、磐城の方に行く山の線が渋滞したから何かあったなと思って、妻を連れて逃げた。地震の日の5時頃、あの日に逃げたのは浪江ではほとんどいないと思う。無我夢中で、逃げないと危ないと思った。嫌いな東電で死にたくないという思いだった。

「どこにぶつけていいかわからない憤りで12年が経った。いつかは東電に仕返したい、今でもそう思っている。それは、俺が74歳まで生きる糧、団塊の世代だから闘争本能が強いのかもわからない。何ができるのかもわからないが、合法的に痛めつけたい」とおっしゃられたそうだ。すごい言葉だな思うし、そんな強い思いがあるからこそ、ここまで頑張ってこられたのだと思った。その背後には、いかばかりの怒りや無念があることか。

彼は、その後の努力で、彼は移住先の白河で窯元として仕事を再建し、現在は大堀相馬焼を広めている。

もうお一人、窯元の方があった。父が馬の絵付けの名手で、彼は子どものころから父が馬の絵を描く姿をずっと見ていたが、自分で描いたことはなかった。亡くなる十年ほど前から癌を患い、自分が馬の絵を描いてしまうと、父に長くないのだと思わせてしまうと思い、ずっと描かずにいたそうだ。それが、震災後の東京で、父が亡くなり、人に頼まれて初めて描いてみたら、驚くほどうまく描けたのだそうだ。飯館村のテツ子さんの話と重なった。伝承、継承というものは、意図せずとも、繰り返し接するなかで身体に乗り移るものなのかもしれない。

彼が一番気にかけていたことは、子ども

たちが転居先の学校に馴染めるか、いじめられないかであり、避難先の東京の家に、小学生の長男の友だちが遊びに来た時、「助かった」と思ったそうだ。これも辛い話だ。



それから、当時は大学生で仙台に住んでいたが、春休みで浪江の実家に帰省した時に被災したという女性。彼女は、自宅近くの保育所でボランティアをするためのオリエンテーションの帰り道で地震が起きた。立っていられず、田んぼから砂煙が立ち、電柱が波打つように揺れ、少年野球チームはグランドでパニックになっていた。何とか無事に家に帰ったが、震災についての状況はわからず、家族はそれぞれが避難できる所に避難し、電話も通じなかった。家族がどこでどのように避難生活を送っているかはなかなかわからず、伝言ダイヤルで状況を知り、友人らとの連絡はSNSを通じて行った。

とくに両親は福祉施設で働いていたため、それぞれが職場ごとバスで遠方へ避難し、どこにいるのかもわからず連絡が取れたのは約1か月後だった。テレビは見られなかったが、3~4日後にYouTubeで沿岸部の様子を知った。原発事故のことは友人から聞いて知った。浪江の自宅は震災の影響で破損することはなかったが、原発事故により避難を強いられ、転々とし、学校が5月に始まったためその時に仙台に戻った。

彼女は、震災にまつわるモノを3つ持ってきててくれた。1つめは「当日使っていた連絡用携帯」、2つ目は「お金で買えない家族写真」、3つ目は「震災後の生活を支えてくれた電子レンジの写真」だった。避難する時は、携帯電話と財布、寝泊まりできるだけのものを持ち出しただけだった。携帯電話で電話はつながらなかつたものの、mixi（SNS）やYouTubeを使えたし、伝言ダイヤルで家族の近況を知ることがで

きるツールとなった。家族写真は、震災後避難はしていたものの、規制がなく自宅へ入ることができたため、両親が「お金で買えないもの」として子どもたち3人が1年生だった時に写真館で撮った家族写真を持ってきた。両親は少しずつ使えそうな衣類や食器を持ち出し、中学校から吹奏楽部に所属していたので、買ったばかりのクラリネットを持ってきてもらった。3つ目の電子レンジは、避難してから支援物資でもらったものだった。たくさんある支援物資のひとつで、日本赤十字と書かれたシールが貼られていた。震災から12年経過して、ちょうど3日前に使えなくなった。結構頑張ってくれた。最後に電子レンジで調理したのは人参だった。

彼女の祖父は、震災前も認知症のような症状があったものの友人とゴルフなどをして交流はあったが、震災によって「こんなところに住まないといけないのか」と思うほどの狭さのアパートなどに転居せざるを得なくなり、趣味のゴルフ仲間もいなくなり認知症が速く進んだように思う。現在は、ご両親、祖母と一緒に暮らしている。震災により浪江を離れ、家族がバラバラになってしまったが、今は白河町で家族一緒に住んでいるとのことだった。



原発事故当時、高校生だった女性は、避難時に持ち出した漫画本と避難所で書いていた日誌を持ってきてくれた。原発事故が起きたものの、すぐに帰れると思い何も持たず避難したため、弟が持ち出した漫画本を長く続いた避難所生活で何度もきょうだいで回し読みした。



院生は、参加した高校生からも当時の話を聞いたそうだ、保育所にいるときに震災を体験し、保育園の先生がパソコンを守っていた記憶や水道管が破裂し泥水が噴出した。また、震災の思い出のモノとして「ガラスバッヂ」の写真を見せてくれたという。ガラスバッヂとは個人用の線量計である。小学生の時は学校の先生からつけるよう言われてつけていたが、どういうものかはわからないままつけていたし、結果について何も言わなかった。以前は、検診

車で全身検査を受けたことや県民健康調査の用紙が今年は送られてきたこと、一度甲状腺の検査で指摘を受けたが問題なかったそうだ。そして、県外に行った人はいじめられることもあったようだ。

いろいろと課題もあったようだが、高校生が原発事故についてインタビューするという企画は良い案だと思った。

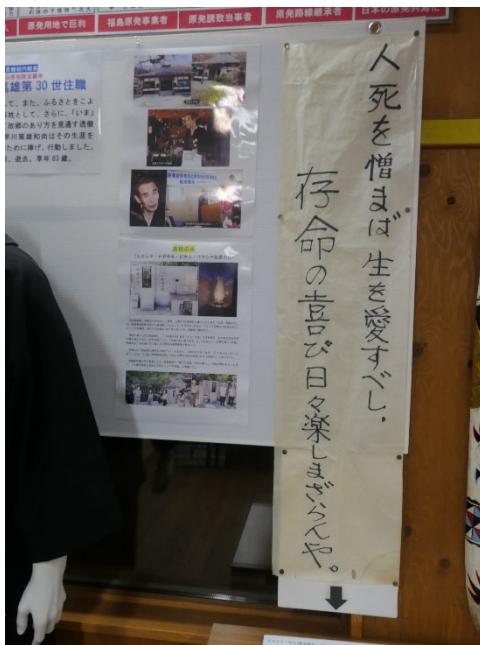
終了後は、EMANON で交流会。美味しいお料理を頂きながら、楽しいひとときだった。



9月4日（月）伝言館

午前は、檜葉町宝鏡寺の伝言館を訪れた。ここ数年は、毎年、宝鏡寺にある伝言館を訪ね、早川篤雄和尚と安斎育郎先生にお話を伺ってきたが、早川和尚もいなくなってしまった。和尚は第30世住職で館長だったが、去年12月29日に呼吸器科で亡くなった。83歳だった。

昨年9月、早川和尚があまりに痩せておられて心配になったが、頭脳明晰、声も大きく張りがあり、相変わらず愛と情熱にあふれておられた。今回、早川和尚に関する展示がたくさん加えられており、「人死を憎まば生を愛すべし。存命の喜び日々楽しまざらんや」の手書きの文字に和尚のお顔が浮かび、涙が出た。



安斎先生も大切な同士を失ってがっかりされている様子だった。早川和尚との出会いなど語ってくださいました。

安斎先生は東大工学部の電子工学科第1期生だった。1962年に電子工学科が開校

して、当時日本は電子工作級の技術者を養成するためにわざわざ東大に作った。東大に。1960年にできて、最初の2年間準備期間で、62年から学生を募集した。15人の中の1人だったが、勉強しているうちに反原発になった。このお寺は1395年に創建された室町時代の古い浄土宗のお寺。彼と知り合ったのは1973年。最初、福島の人々は1960年ぐらいから原発に関心を示して、アトミーポリス構想と言って、原子力で町を栄えさせるという構想にみんな乗つかった。「原子力明るい未来のエネルギー」ということで、住民そのものが原発地域に誇った原子力開発に協力する時代だった。

反対運動も何度かあっても、60年代、70年代、73年になってこの町、檜葉町と隣の富岡町に福島第二原発が来るとなつた。早川和尚も他人事から自分事になり、住民運動を始めた。その時に、原子力について何にもわからないから、東大の安斎さんを呼ぼうよとなって、初めて来たのが73年だった。

69年ごろから住民運動に関わるようになって、勉強もしていた。日本学術会議で初めての原発問題でシンポジウムを開いた時に、若干32歳で東大医学部の助手だったけれど、基調報告を頼まれて、日本の原発を点検する健全性・不健全性を点検する6項目を出した。それで凄まじいアカデミックハラスメントを体験することになり、研究教育から一切外された。そんななかで力を合わせて一緒に裁判もやってきた。

今回、安斎先生が、放射線の影響は医学的影響（身体的影響・遺伝的影響）だけではなく、心理的影響、社会的影響、生存意欲毀損効果が大きく、事態は科学的に安全

か否かだけでの問題ではないのだとおしゃったのには少し驚いた。

このたび、伝言館には新たに丹治杉江さんというパワフルな事務局長が加わった。丹治さんは、原発事故で群馬に避難した。原発から 34 キロだったが、自主避難と言われる。「何が自主避難か、自力避難だ」と言っている。自分で考えて、自分で様々なところから避難した。こんな思いをして、国も責任を取らない。裁判で闘った。避難者訴訟の戦闘に立って国や東電と闘い、最高裁でも 2 回も陳述したが、国の賠償責任は認められなかった。

最後に決まった賠償は 25 万円、1 回だけ。正直言って、裁判代にもならないし、交通費にもならない金額だが、それでも、戦うなかで、原発の本質が見えた。エネルギーは他の手段では作れるし、汚染水だって他に処分方法がある。なぜ、わざわざ人類に危険なものを選ぶのか。最高裁で負けたが、早川和尚が亡くなられ、その悔しさを手伝わざるを得なかった。避難先の群馬県の前橋市からいわきに戻って、いわきから 70 キロの距離を車で通っている。

丹治さんは、せっかく漁業ができるようになったのに、処理水放出でまた魚が売れなくなると、ALPS 処理汚染水の差止め訴訟の事務局長もやっておられるそうだ。



おれたちの伝承館

午後は自由なフィールドワークの時間となり、私は、南相馬市小高区にある「おれたちの伝承館」を訪ねた。オープンするのを知り、行かなければと思っていたところだ。

おれたちの伝承館は、アートで忘却に異議を唱えるとして、2023 年 7 月 12 日にオープンした。2016 年 7 月 12 日に小高地区は避難解除となった。倉庫を改装した館内に、原発事故を題材としたアート作品が所狭しと並んでいる。館長の中筋純さんは写真家で、2007 年からチェルノブイリをテーマに写真を撮り続けてきた。福島には 2013 年から浪江町に入り、本格的に撮影を始めた。また、原発事故をテーマにする作品展

「もやい展」を 2017 年からあちこちで開催してきた。

場所は、小高駅前で双葉屋旅館を営む小林友子さんが提供した。小高区の全住民が避難し、人生を替えられた無念を伝えなければならないという想いでいたところ、中筋さんの構想を知って後押しした。

入口には富岡町夜ノ森の桜並木の写真。中に入ると、和紙で作られた牛の死体。避難できず餓死した牛たちで、木の柵はかじ

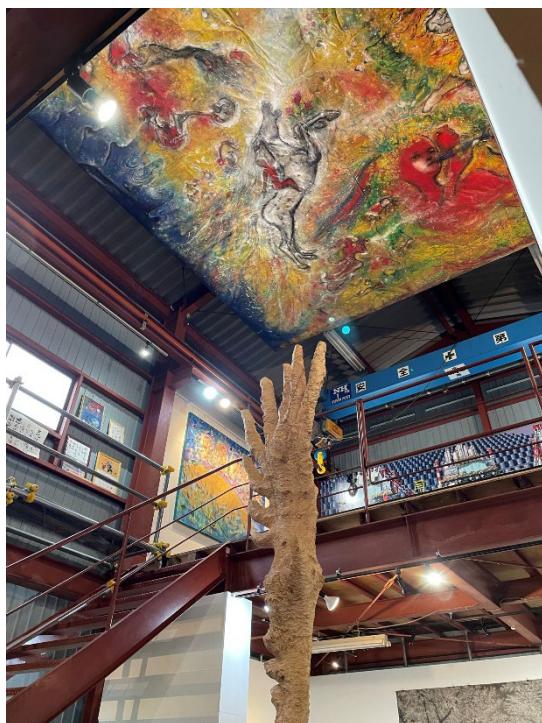
られている。中央には吹き抜けがあり、見上げると黄色と青の一面に馬や魚が描かれた天井画がある。そこに向けて大地から手を伸ばしたような、あるいは羽を広げているような木製の彫像。「鳳凰」だそうだ。

あらためてアートの力を感じる。さまざまな形で受け渡されるものがある。福島の物語は、もっともっと多様に立ち上がるべきなのだ。来年のプロジェクトは、院生たちを連れて来ようと思う。



院生たちは、伝言館の丹治さんの案内で大熊町や双葉町を見て回ったようだ。

夜は古滝屋に泊り、院生たちと美味しい食事を頂き、フィールドワークの共有、振り返りをして温泉に入った。



9月5日(火) 考証館Fツアー

この日は、湯元温泉古滝屋にある原子力災害考証館のFツアーに参加した。まずは、考証館。やはり一番インパクトがあるのは、木村紀夫さんによる造形だろう。原発事故のために我が子の搜索ができなくなり、5年以上たって、ようやく歯とあごの骨を発見するに至った。次女の汐凪ちゃんは当時7歳、遺骨が発見されるまで5年9か月、今も生きていればちょうど20歳になっていたとのことで、木村さんは大学生が考証館を訪れて汐凪ちゃんの物語を聞いていくことを喜ばれるそうだ。

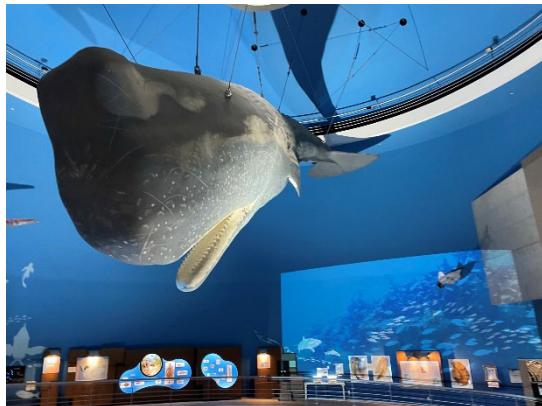
マイクロバスでのフィールドワークでは、コメ作りができなくなった田んぼに、置かれたたくさんのソーラーパネルを観た。ソーラーパネルは20、30年で使えなくなり、有害物質を含んでいることから廃棄も難しいので、結局これも未来に負の遺産を残していることになる。そういうことを考え、今は使えない田んぼであっても、ソーラーパネルの置き場所として貸すことなく、いつか来る日のために、手入れを続いている農家さんもあるそうだ。

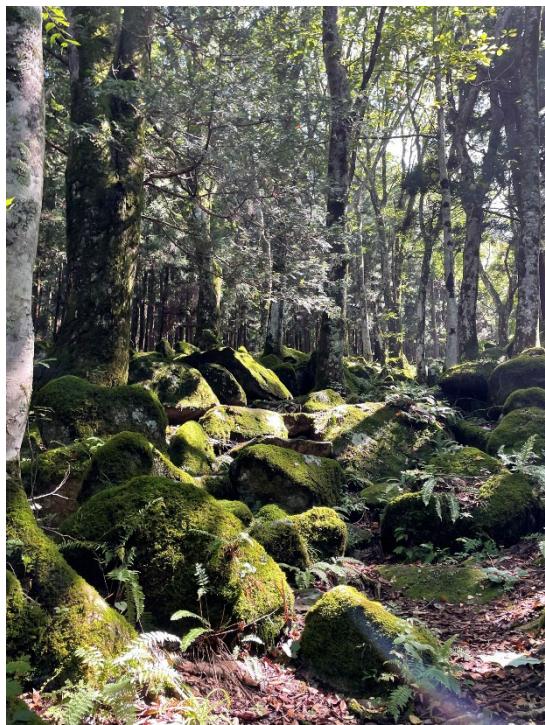


おまけ

プロジェクト終了後、事務局の平田さんと一緒に、シンポジウムで流すビデオレターを撮るために、気仙沼や大船渡に立ち寄り、宮古と遠野を訪れた。2011年、2012年の頃を思い出す場面が多く、胸にじんとくるものがあった。

以前より気になっていた山田町の「鯨と海の科学館」にも立ち寄ったが、度重なる災厄とそれを乗り越える人々の力を確認した。





懐かしい人々と再会するとお互い嬉しくてたまらなくなる。災害は怖ろしいが、こんな素敵なものをそっと置いていってくれる。あらゆることに感謝したくなり、生きる勇気と自信が湧いてくる。まるで奇跡のようなものだ。そんなことを多くの人々に伝えていけたらと思う。

つづく

